静岡県小笠郡大須賀町文化財調査報告書第二集

大須賀町愛宕山横穴古墳群

調査報告書

静岡県小笠郡大須賀町教育委員会

序

大須賀町横須賀の町並の北側に迫っている愛宕山の山腹に、横穴古墳が発見されたのは全く思いがけないことでありました。

横須賀は、江戸時代の城下町で、横須賀城は天正年間に築城され、それ以後の史実はいろいろ知られていますが、それ以前のことは、まことに茫漠としています。古墳時代は少なくとも、1200年位は前で、そのような古い昔に、既にこの地に相当多くの人が生活を営んでいたことを、この古墳は物語って、大須賀の古代史の一部を明らかにしてくれました。

この愛宕山横穴古墳の調査に関しては、当時調査に当った専門家によって、詳細な調査報告書が作成されていて、今般たまたまそれを見る機会を得たが、大須賀町にとって大変有益且つ貴重な郷土史料であることが分かり、町民にも、是非これを知って欲しいものと考えました。

依って大須賀町教育委員会においても、静岡県教育委員会の了承のもとに調査報告書をそのまま印行し、本町文化財調査報告書第二集とする次第であります。

昭和50年3月31日

小笠郡大須賀町教育委員会

教育長　岡　本　七　郎

目　　次

序
小笠郡大須賀町愛宕横穴群の調査……川江　秀孝・杉山　彰悟…27
Ⅰ　ま　え　が　き……27
Ⅱ　調　査　の　経　過……27
Ⅲ　位　　置……28
Ⅳ　各　横　穴　概　要……30
Ⅴ　築造年代について……40

挿　図　目　次

第7図　　同　　石器実測図……15
第8図　瓦屋西カマド塚位置図……21
第9図　　同　　墳丘測量図……22
第10図　　同　　主体部実測図……23
第11図　　同　　須恵器実測図……25
第12図　愛宕横穴群位置図……29

図　版　目　次

図版第7　愛宕横穴群 (1)
A：第3号横穴全景（南から）
B：第3号横穴全景（南から敷石除去後）
図版第8　愛宕横穴群 (2)
A：第3号横穴敷石（南から）
B：第3号横穴敷石（北から）
図版第9　愛宕横穴群 (3)
A：第4号横穴全景（南から）
B：第4号横穴敷石（東から）
図版第10　愛宕横穴群 (4)
A：第4号横穴全景（南から敷石除去後）
B：第4号横穴全景（北東から敷石除去後）
図版第11　愛宕横穴群 (5)
A：第3号横穴　鉄鏃　Ⅰ
B：第3号横穴　鉄鏃　Ⅱ
図版第12　愛宕横穴群 (6)
A：第4号横穴　平瓶・耳環
B：第3号横穴　刀子

小笠郡大須賀町愛宕横穴群の調査

川江　秀孝・杉山　彰梧

Ⅰ　ま　え　が　き

本横穴群は、昭和35年に静岡県立横須賀高等学校校庭造成工事中に発見された2基と、昭和44年3月の校庭拡張工事中に発見された2基の計4基で単位群を構成するものである。本報告は、昭和44年3月に同校校長小山一重が調査主体者となって、同校の費用負担で発掘調査を実施した2基の調査報告であるが、先に発見された2基の存在も群集墳の研究上無視できないので、出土遺物の実測作業を調査に併行して行い、本報告に登載させた。発掘調査は、静岡県立川根高等学校教諭堀田良雄を担当者として行われ、川江秀孝と杉山彰梧とがこれを補佐した。

調査にあたっては資材の調達、宿舎の手配等に同校教諭袴田嘉昭氏のお世話になったほか、同校郷土研究部員の協力を得たことを感謝したい。

本報告の執筆は、第3号墳について杉山が分担したほかは、川江によるものである。登載させた実測図は、両名が作成したものを川江が整図したものである。図版のうち、各墳の写真撮影は堀田の手により、遺物については向坂鋼二氏によるものである。その他向坂氏には、種々お世話になった。

出土の遺物は同校で保管されており、実測図については川江が保管している。

Ⅱ　調　査　の　経　過

昭和44年3月

県立横須賀高等学校で校庭拡張工事中に、横穴墳が発見されたとの報告が入り、県教育委員会と堀田とが話し合った結果、調査費を県立横須賀高等学校が負担し、堀田が調査を担当するということで、調査が開始されることとなった。調査に際し、川江と杉山が補佐し、同校教諭袴田嘉昭氏によって資材の調達等が行われた。

昭和44年3月16日

午前9時、国鉄藤枝駅前に集合し、現地へ向う。午後1時現地へ到着。早速現場の状況を視察する。現場は既に校庭拡張工事と、それに伴う道路工事の為、旧地形を復元するのが不可能なほど変貌していた。袴田氏と調査について打合せ、同校郷土研究部の協力を依頼する。

昭和44年3月17日

古墳の確認作業を開始。午後になって、平面が卵形を呈する凹地を検出する。近世陶器片が出土し、横穴墳であるか疑わしいが、昭和35年に同所で検出された横穴墳の略図によれば、やはり卵形を呈しているので一応調査を続行する。

昭和44年3月18日

凹地に充満する土砂を除去したところ、床面が不整形であるばかりでなく、近世陶器が床面に密

着して検出されたので、近世の攪乱と断定する。午後より、道路によって削平された断面の観察を行う。円礫が集中している個所を発見し、精査したところ、横穴墳を2基確認する。1個所は閉塞石であり、他の1個所は直接的な横穴墳との関連がつかめなかった。一応地山の円礫とは異なる河原石の集積であるので、古墳との関連も考えられたが、詳細を知ることができなかった。昭和35年2月発見された2基と同一群と思われるので、西側を第3号墳、東側を第4号墳と命名する。調査終了間際に第3号墳より鉄鏃が出土する。

昭和44年3月19日

3号墳を精査する。玄室内西半に扁して敷石を、東半部に棺台を検出する。棺台北寄りで、奥壁に矢束を立てかけてあったものが倒れ込んだと思われるような状態で鉄鏃が出土する。鋒の方向は一定していない。敷石中央部より刀子片が出土する。写真撮影の後実測を完了させる。

4号墳の崩落した土砂の除去を行い、閉塞石を露呈させる。3号墳同様、西に扁した位置に敷石を確認する。

昭和44年3月20日

第4号墳を精査。敷石上で閉塞石に接して須恵器片を、敷石中央部より耳環を検出する。写真撮影・実測を完了し発掘を終了する。大須賀町役場土木課へおもむき、地形測量の為の水準点の位置を調べる。横須賀高等学校東側に隣接する三熊野神社境内の国土地理院二等水準点№2612より水準測量を行い、仮B・Mを設定する。午後は郷土研究部員と共に、付近の踏査を行う。川原町十二社神社裏山に6基の横穴墳を確認する。

昭和44年3月21日

現場の状況を縮尺100分の1で測量する。水準点の標高が知られていない為、比例配分で等高線を求めるようにし、要所要所をレベリングする。後日二等水準点№2612は、海抜12m49.6cmであることを知り換算する。

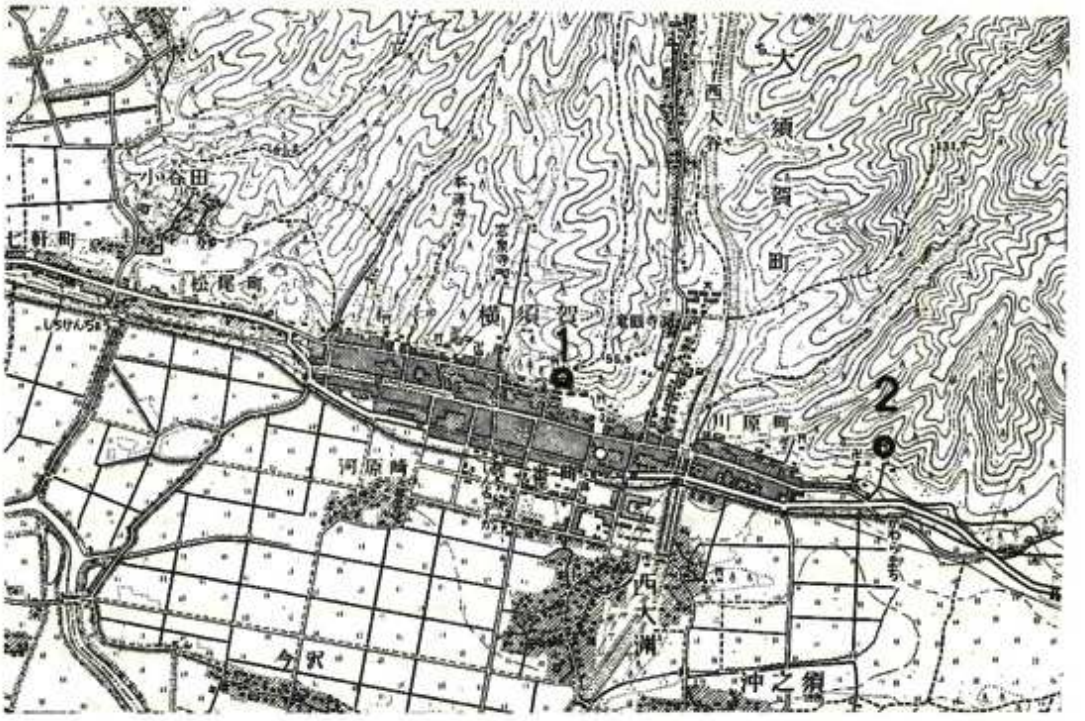
調査は6日間で終了した。調査にあたって、多大な協力をおしまなかった袴田教諭をはじめ、同校郷土研究部員には、当方の手違いから芳名を記録できなかったが、感謝の念を表したい。

Ⅲ 位　　置

愛宕横穴群は、静岡県大須賀町横須賀に存する。小笠山より派生した丘陵が南西に伸び、その先端に小高い山陵をつくり出している。その小高い山陵を通称愛宕山と呼び、中腹に小さな神社を祀っている。丘陵の東には西大谷川が流れており、若干沖積地を作っているが、むしろ土砂を運ぶことが多く、天井川となっている。丘陵の南端から海岸まで約2kmで、町の大半が砂丘であると言えるほどである。愛宕山の直下に三熊野神社、県立横須賀高校とがあり、横穴墳は県立横須賀高校の裏山で発見された。発見個所は既に地形が変貌しており旧形を知ることができなかった。

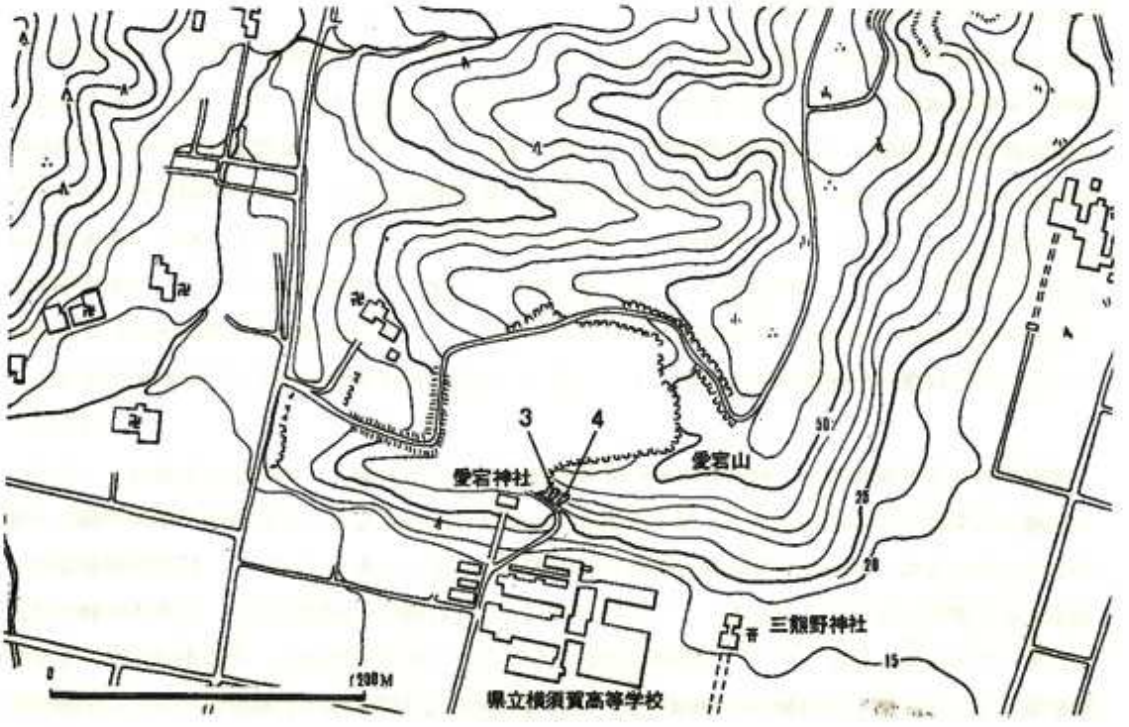
Ⅳ 各 横 穴 概 要

今回我々が調査した2基の横穴墳の外、2基の横穴墳が発見され、簡単な報告がなされている（横須賀高等学校郷土研究部・1960）。我々はそれを第1号墳・第2号墳とし、以下今回調査した



第12図 愛宕横穴群位置図 1/25000「袋井」

1 愛宕横穴群　2 十二社神社横穴群



第13図 愛宕横穴群付近地形図

2基を3号・4号とした。報告をみると、いくつかの間違いが指摘できるうえ、紹介されている実測図でも現場の認識に疑問が持たれてくる。しかし残された唯一の記録であるので、その全文を再録し1・2号墳の紹介としたい。出土遺物は川江と杉山が実測したものを登載させたが、各墳の実測図は川江が一部加筆し、原図に基き転載したものである。

愛宕山横穴古墳（仮称）調査概要

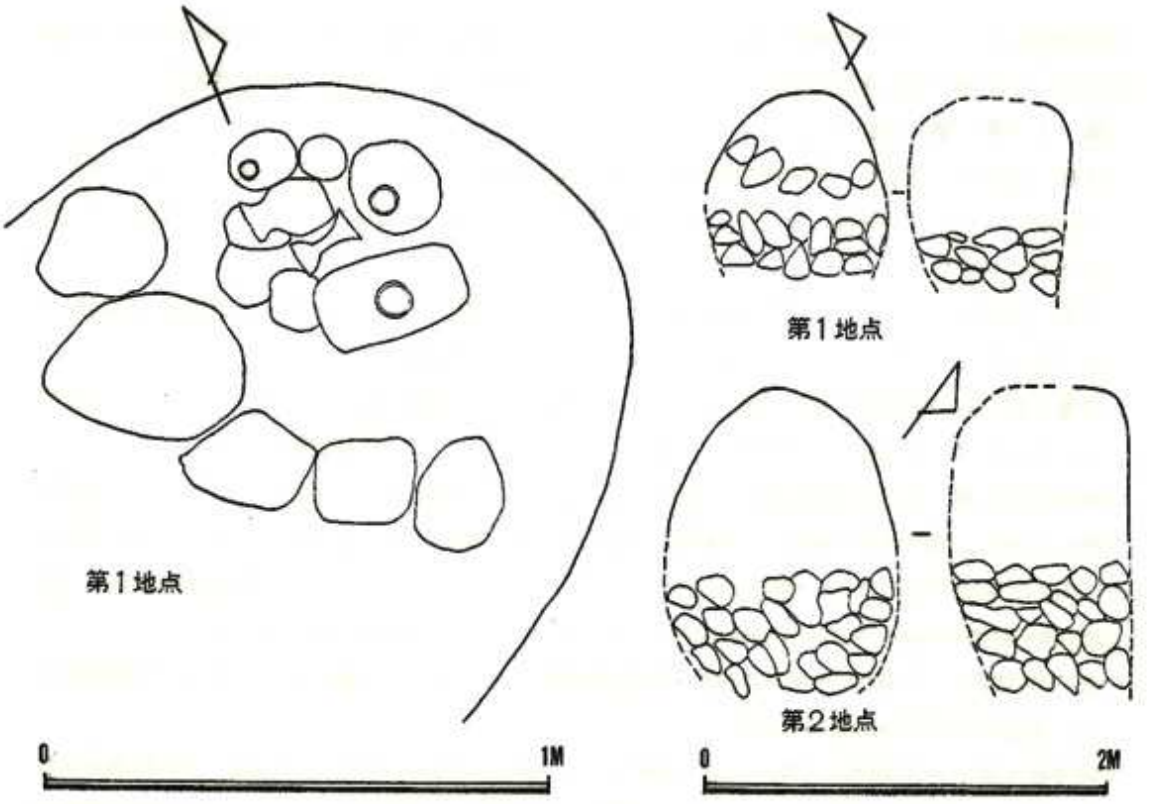
調査者　横須賀高校郷土研究部
調査責任者　竹　折　直　吉

『愛宕山横穴古墳（仮称）が発見されたのは、横須賀高校の新設運動場工事の途中において古川組の協力を得て、昭和35年9月30日に発見されたものであります。遺跡の発見地点は表紙に示した通り静岡県小笠郡大須賀町横須賀愛宕山の南側に面した約40度の傾斜地（砂岩質で海抜40mの地点）であり、森林が繁り表面調査の困難な地点でありました。発見の知らせを聞いて現場に急行した時には、遺跡の大半は破壊されていました。そこで工事の一時中止を求め、残存遺跡の部分について調査、実測を行いました。更に工事人夫の人達に種々の角度から破壊された部分の状態を聴取したところ別紙の如き（横穴の平面・断面実測図参照）横穴古墳が復元しました（勿論推察にすぎません。）そこで注目されることは規模の小なること、特に第一地点横穴内部の石の配列であり、火葬墓と推察してみた次第です。そこで納骨器と骨片の問題になるわけですが、納骨器としては三足有蓋壺が考えられるのですが、少々器型が小さいので、更に他の須恵器が使用されたものと考えられます。骨片は綿密に調査してみたのですが、残念ながら検出できませんでした。結局、関連遺跡の発見によって実証しなくてはならないと思います。

出土品は須恵器19点で、第1地点からは個体数にして17点（三足有蓋壺1・平瓶3・長頸壺1・高坏2・俵型横瓶1・坏5・その他破片4）、第2地点からは坏が2点のみでした。（第1地点のものと同形式）別紙の出土品の実測図はすべて第1地点のものです。（須恵器以外のものは発見されませんでした。）特に本遺跡で注目されることは三足有蓋壺の出土であり、静岡県内ではその報告例を聞いておりません。なお本遺跡の年代推定でありますが、日本における火葬の一般普及のはじまりは文武天皇4年（西暦700年）以降（続日本紀）と考えられておりますので、土器の形式等と関連づけて8世紀（奈良〜平安初期）と考えられます。とにかく本遺跡は工事の伴出によるもので、その実証は後日の関連遺跡の発見によって実証されなければならないことは言をまちません。

以上』

概報所載の実測図には『点線部分石積の部分は発見者の話による。』という注がある。ここでいう石積とは閉塞石のことであろう。第1号墳については、弧状にならんだ5個の円礫の内側に土器がならんでいる様子が示されている。彼ら自身が実測したものであろうから、17点の須恵器は一括品とみて間違いなさそうである。しかし2号墳については特別な記述がなく、工事中に検出されてしまったのかもしれないので、他に伴出物がなかったとは断定できない。平面形は両者とも小判形を呈している。第1号墳最大巾90cm前後、第2号墳最大巾110cm前後と規模が小さい。閉塞石の位置が復元されたものにかなり近いものだとすれば、奥行は2号墳で1mに満たず、第1号墳では



第14図　愛宕横穴群第1号墳・第2号墳実測図

土器の床面に占る面積が多く、被葬者が安置される充分なスペースがあるとは言えないし、規模が小さすぎるきらいがする。しかし、本村B群1号横穴墳（宮本・植松1968）のような小規模な例もあるので、一応要件を満し得るものと考えたい。玄室平面形が小判形を呈するものは類例が少ない。強いて同形と言うならば、小提山第1号横穴墳（池谷・1962）に近似していると言えよう。小提山例は、奥行2m32cm・最大巾2m38cm・羨道巾70cm・同長さ11m80cmと規模は大きく、第Ⅲ期中頃の須恵器が検出されている。

この2基の横穴墳が発見された当時を知る同校教諭の話や、残された一枚の写真から判断して、我々が調査した2基の横穴墳を含めて、同一単位群を構成するものであることは間違いなさそうである。そして本横穴群は愛宕山（海抜55.9m）の南側斜面の中腹（海抜30m）に構築されており、南側斜面のうち、とくに北に窪んでいる地域を選んで占地している。このような地域に横穴を構築する場合、通常等高線に直角に穴を穿つので、西寄りの横穴はやや東むきに、東側の横穴はやや西むきに開口するであろう。第1号横穴墳と第2号横穴墳のどちらが東に位置していたかは明瞭ではないが、道路建設の為山麓からブルトーザーで、東から西へ登りながら道をつけたものであるので、遺存状態の悪い第2号横穴墳が先に発見されたものと考えられる。つまり第1号横穴墳は第2号横穴墳の西に位置していたと考えられ、主軸方向は第2号横穴墳と同じか、やや東向きとなるであろう。ところが、実測図でみるかぎり、第2号横穴墳に比べ90度近くも西に向いている。このようなことがおこり得るであろうか。あくまでも想像の域を出ないが、現場が砂礫層という条件で、横穴

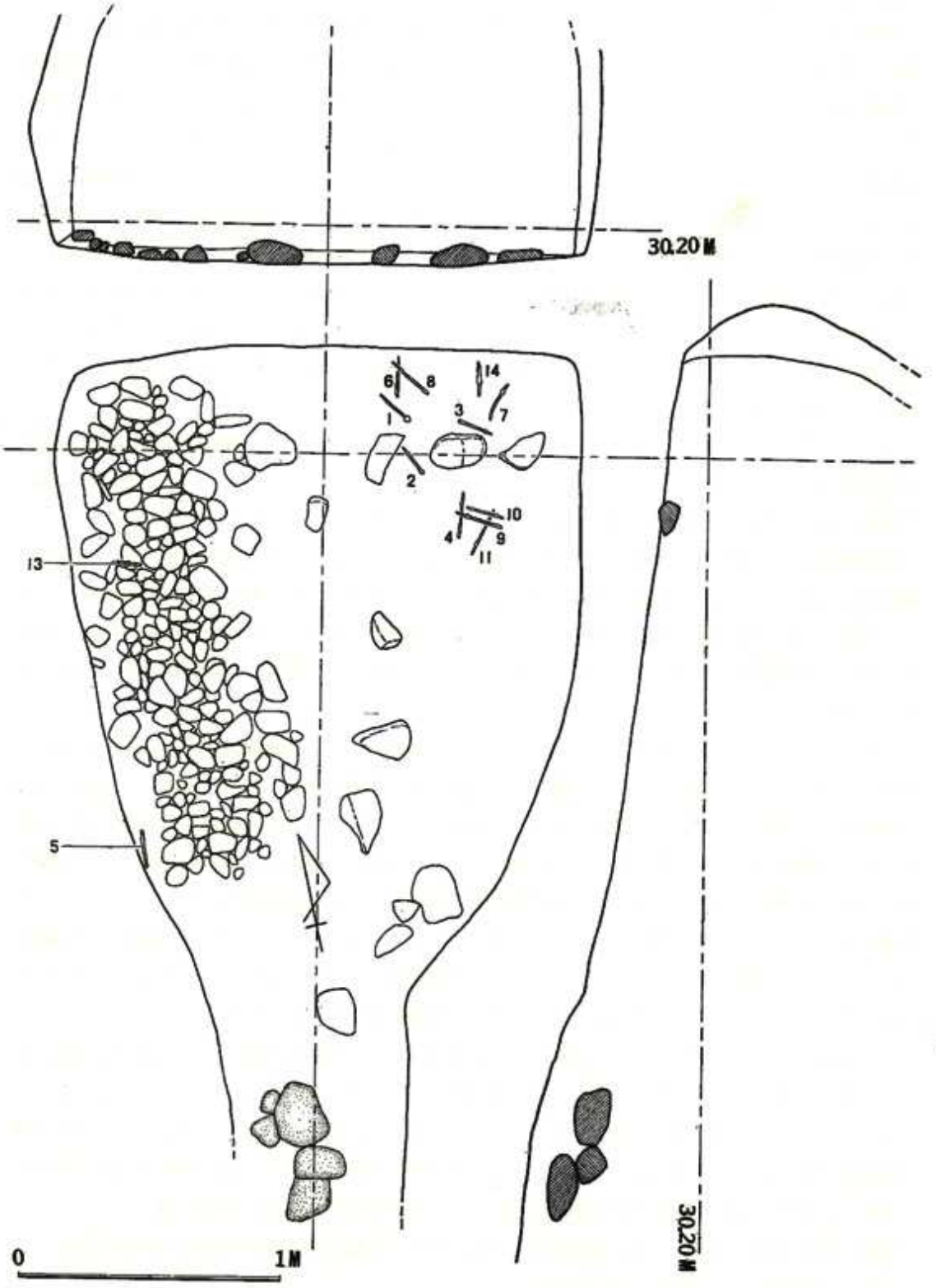
墳は崩壊が著しく、壁面の検出にはかなりの苦労が強いられたであろうから、全容を検出するに誤認があったと考えるべきではないだろうか。以下出土遺物を紹介したい。（挿図第16図）

第　1　号　墳（第17図）

- 坏身（17～20）計4点、最大径120㎜～110㎜、器高36㎜～45㎜を有し灰色を呈する。胎土焼成とも良好だが粗い砂が器壁にみえる。17は比較的シャープにつくられているが、他は器肉が厚く鈍厚な感じがする。
- 坏蓋（21～23）計3点、口径114㎜～117㎜、器高34㎜～49㎜を計る。灰色ないしは黒灰色を呈する。21・22とも丸味をおびた器形であるが、23は天井部の傾斜が大きい。
- 壺蓋（24）口径101㎜・器高91㎜、天井部に径18㎜・高さ11㎜の鈕が付されている。灰白色を呈し、胎土焼成とも良好で、天井部の全面と体部の半分に緑色の自然釉が認められる。
- 高坏（25・26）両者とも無蓋高坏である。25は発見当初、脚部まで完存していたようだが今は欠損しており、器高を知り得ない。現存高140㎜・口径111㎜・坏部高さ57㎜を計る。坏部・脚部に二条の沈線が認められる。脚部に透しはない。26は25に比べ坏部の長大化が顕著である。口径157㎜・器高128㎜・坏部高さ50㎜を計る。薬灰色を呈し胎土に粗砂が認められる。
- 直口壺（27）口径102㎜・器高164㎜・胴径108㎜を計る。胴部に沈線が認められる。灰黒色を呈し、部分的に自然釉が認められる。
- 脚付壺（28）長さ60㎜の三脚に、高さ130㎜の直口壺をのせたもので、口径64㎜、胴径136㎜を計る。肩部に二条の沈線をめぐらし、胴部下半分に篦整形痕を残す。肩部より上に緑色の自然釉が認められる。灰白色を呈し、胎土焼成とも良好である。肩部に直径82㎜になる円形の付着物が認められる。24の壺蓋と胎土・焼成・色調などが酷似している点からして、24と28はセット関係と考えられるが、本来は口径82㎜の蓋とセットをなすものであったと考えられる。壺に三脚が付される例は少なく、岡山新本（石田・1961）を知るにすぎない。静岡大鈴2号墳（春田・1971）例は、盌に小さな三足が付されている。駿河伊庄谷横穴墳（望月他・1963）において、愛宕横穴墳から獣足付壺の出土を報じているが、本例のことであろう。
- 台付盌（32）口径105㎜・器高133㎜・灰色を呈し、器肉厚く鈍厚な感じがする。
- 平瓶（33～35）3点出土しており、三者とも大きさが一定ではない。器高は33が100㎜、35は169㎜である。35には珠文が付されている。
- 横瓶（36）いわゆる俵壺などと称されるもので、長径334㎜・短径210㎜・高さ200㎜のフットボール形の胴部全面に叩目がある。この叩目といい、器形といい、俵を連想させるものである。高さ50㎜・口径約123㎜の口縁部は、胴部の側面につく。灰黒色を呈し、火ぶくれと亀裂が認められるほかは、焼成も良好である。

第　2　号　墳

- 坏身（29）口径111㎜・最大径127㎜・器高50㎜を計る。灰色を呈し胎土焼成とも良好である。
- 台付盌（30）口径76㎜・胴径105㎜・器高142㎜を計る。黒味を帯た灰色を呈し、盌部は器肉が薄く、ノタメと三本の沈線が認められるほか、口唇部の内側を篦で整形している。台には三角形の透しが2ケ所にあけられている。



第15図　愛宕横穴群第3号墳実測図

第 3 号 墳

主軸方位N12°E、奥壁部床面海抜高度30.10m、現存全長3.60mを測る。プランは、角のとれた巾広の羽子板状をなし、玄室長約2.45m、最大巾は奥壁に近く2.03m。東側床面プランは、直線的な西側に比べてわずかにふくらみをもち、左右対称ではない。玄室は羨道に向って巾をせばめ約80cmにまでなる。玄室との接線は明確ではないが、平面的に玄室巾のせばまりが著しくなり、また床面が段を有するように傾斜を急にすることなどからそれと認めることができる。床面は奥壁部を最高に約7度の傾斜をもって羨道部に向う。奥壁部は床面プランより更に20cm程奥に湾曲して掘込まれ、上部がそのまま天井部へと続いていたものと思われる。天井部は全て落ち込んでおり、全体の形状は定かではない。ただ閉塞部近くには崩れ落ちた天井部が弧状なしていたことなどから、全体としてはドーム状であったと考えてよいであろう。羨道部における天井は、閉塞部までの削平等のため確かではないが、閉塞石のすぐ内側までその存在を調査時に確認している。他の横穴墳の例と同じく、閉塞部までと考えられる。

玄室内床面には、円礫による敷石と配石が認められた。前者は棺座で、西壁に沿って長さ1.95m・巾55cmの長方形に円礫を敷く。また後者は玄室の東半分を占める棺台である。長さ2m・巾70cmの範囲に20～25cm大の比較的大形の円礫を用いている。閉塞石の一部を転用したのかもしれない。

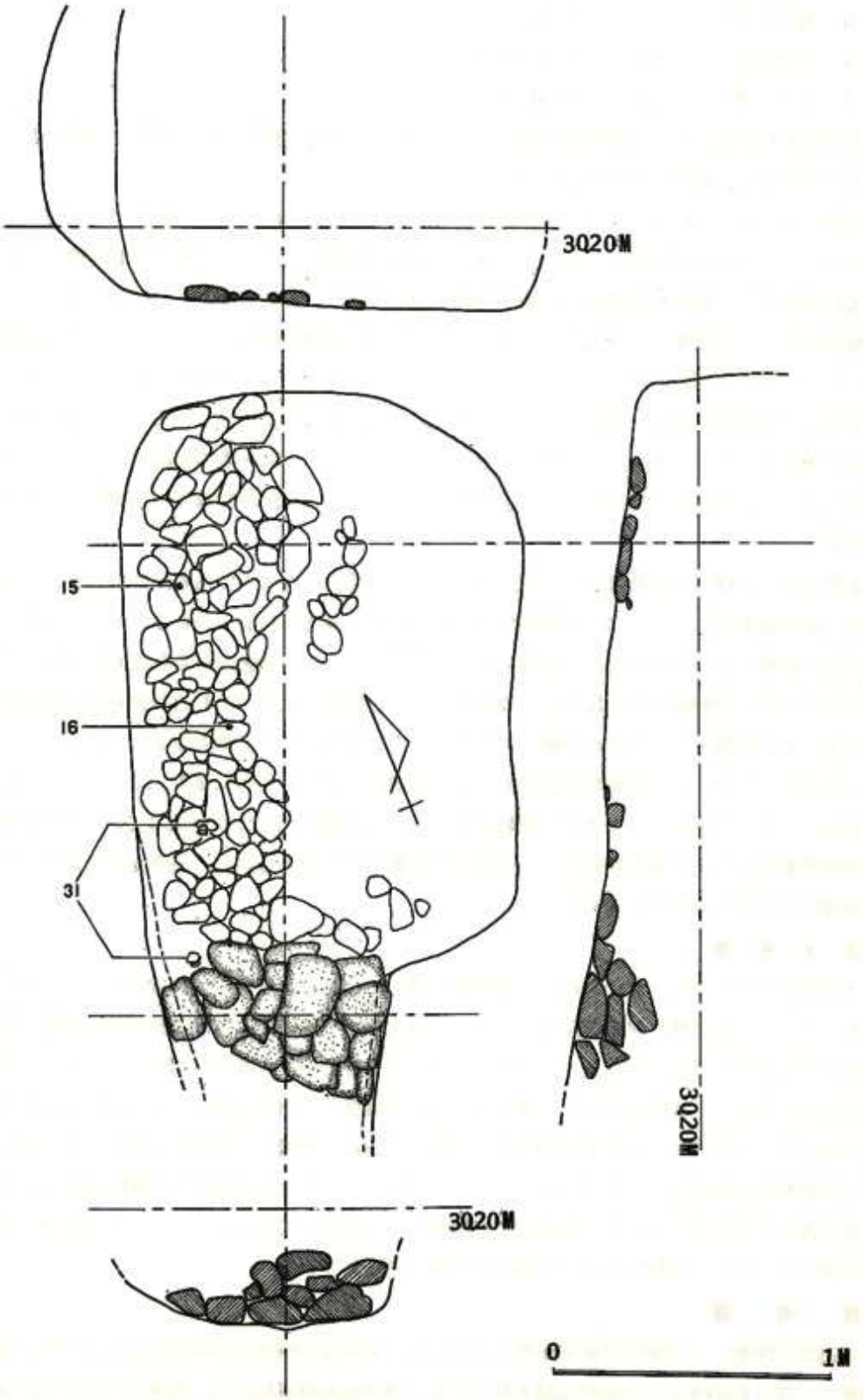
閉塞施設は、玄室のくびれ部から50cm程の羨道部に大形の円礫により設けられている。5個の円礫が残るだけであったが、羨道天井の崩壊、道路敷設に伴う前面の削平等により多くが失われたものと思われる。残る閉塞石は互に接しており、それ自体攪乱を受けているとは認められない。下底面が床面より約10cm上方にあり二次的な状態、つまり追葬に際して置かれた状態にあることを示すものと考えられる。

玄室内床面より刀子・鉄鏃の出土をみる。大きくは西側棺座部と東側奥壁近くとの二ケ所に分かれる。棺座上には、奥壁より70cmの位置に切先を西、刃部を南に向けて刀子（№13）、羨道近くには壁に沿って穂先を南に向けた鉄鏃（№5）が単独で出土している。また東側では奥壁に近い位置に刀子1と鉄鏃10本がほぼまとまって見られた。刀子（№14）は奥壁から10cmの位置に切先を奥壁に、刃部を東壁側に向けている。一群の鉄鏃は特に規則的な出土状態にはないが、分布の上からは奥壁に近い群と№4・9～11の群とに分けることができるかもしれない。ただどの鉄鏃が原位置を保っているかの判断はむずかしい。しいて言えば比較的まとまりをみる№4・9～11がそれにあたるのだろうか。なお、出土位置による鉄鏃の穂先の形態に特に差は認められない。

◦刀子(13)は全長11.2cm・身部長4.6cm・棟巾0.3cm・身巾は関部で1.4cm。平棟平造りで完形である。身部は関から切先にかけて著しく巾をせばめ全長の半分にも満たない長さとなっている。工具としての使用に伴う磨耗と考えてよいであろう。関部には鉏を付け茎に木質が残る。(14)は切先をわずかに欠くが全形を知ることができる。現存長11.9cm・茎部長4.3cm・棟巾0.3cm、身巾は関部で1.6cm。(13)と同様磨耗が顕著で、身の中央部で巾0.9cmとなる。平棟平造り。

◦鉄鏃　総数12本、大半が尖根の棘箆被式である。穂先の形態からは次の四型式に分類できる。

1	三角型式	2本	№1・2
2	斧箭式	1	№3



第16図　愛宕横穴群第4号墳実測図

3	鏃 箭 式	1	№12
4	片刃箭式	6	№4～№9
5	不　明	2	№10・11

片刃箭式が本横穴墳出土鉄鏃の主体をなす。これらは穂先の形態が若干異なり、関のある式とない式とがあるが、銹のため詳細を知り得ない。

本横穴墳には、棺座・棺台二つの埋葬施設をみる。閉塞の状態等から追葬が行われていることは確実であり、4号墳の埋葬との比較、棺台の用材等の関係から棺台が追葬に際して設けられたとしてよいであろう。最初の埋葬時に、既に追葬が考慮されているということは注意される。これら埋葬施設から二人の被葬者を考えることができる。また、本横穴墳出土の刀子に見られる顕著な磨耗は、その日常的な所持・使用という工具としての在り方を考えるのが妥当であろう。とすると№13刀子のような副葬方法が一般的であって、奥壁近くに鉄鏃と共に出土した刀子は整理された状態にあると考えることもできる。この場合、棺台を設ける前に、更に一人の被葬者が存在した可能性が出てくる。出土状態からは棺座上の刀子を除いた遺物が、いずれの被葬者への副葬品であるかは明確でない。

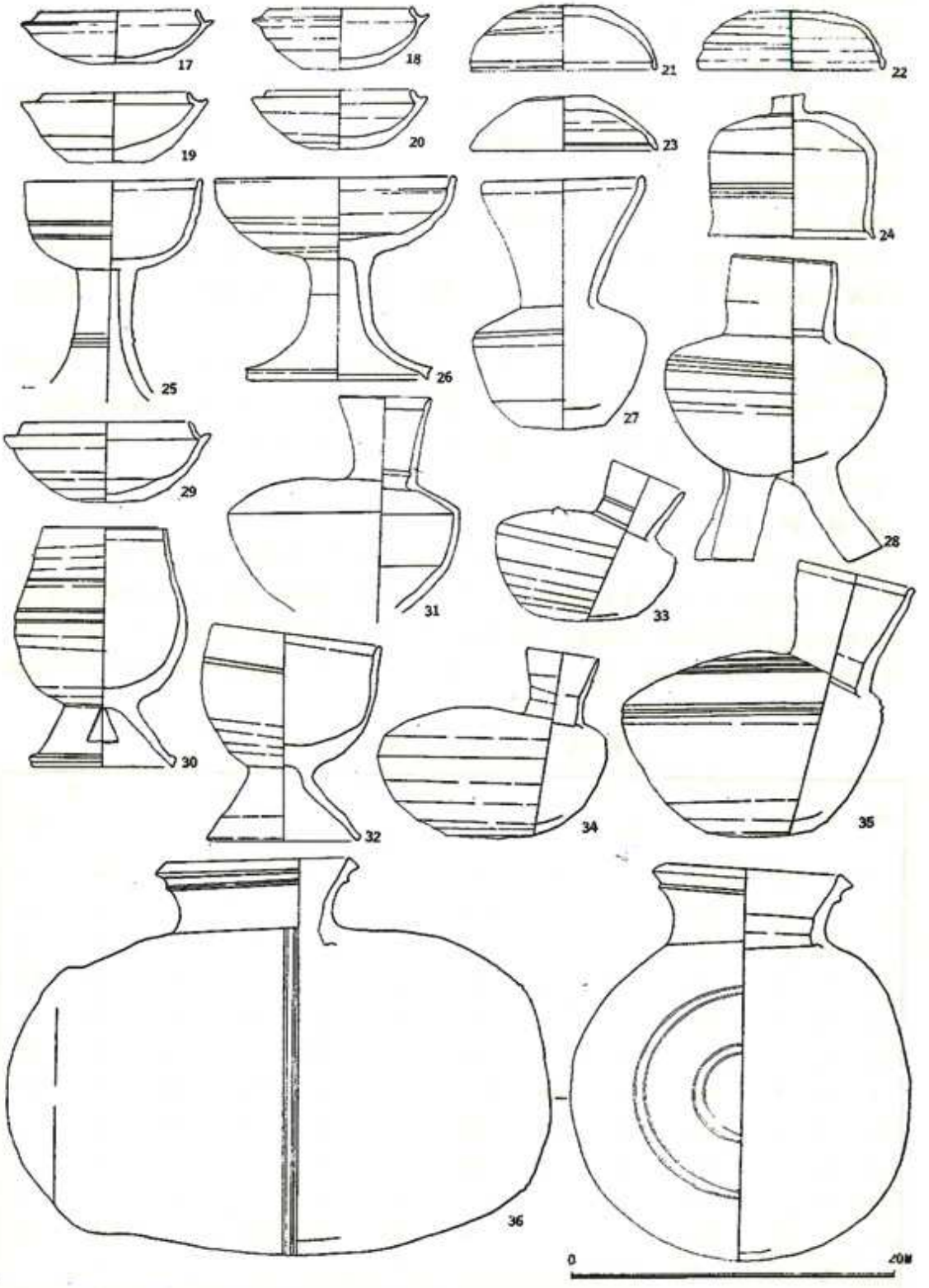
本横穴墳への確実な被葬者は、棺座上と追葬による棺台への二人である。№14刀子から推測した更に一人の被葬者については、現段階ではその可能性が考えられる、というだけにとどめておく。こうした埋葬がいつ行われたか、本墳においては既述のように遺物が限られたものであるため、鉄鏃からその年代を類推する他はない。鉄鏃はほとんど棘箆被式と呼ばれる後期古墳に見られる型式である。また鉄鏃・刀子のみの副葬という点も年代を考える上で参考となるかもしれない。後期古墳の中においては、須恵器編年第Ⅳ期に入ると副葬品が質的・量的に減少していくという傾向がみられる。こうした流れの中で少ない遺物ではあるが、鉄鏃がまとまりを示している点を考慮すると、須恵器第Ⅲ期末ないし第Ⅳ期前半という最初の埋葬年代が考えられる。追葬も第Ⅳ期前半代の比較的短期間の内に行われたと考えたい。

第 4 号 墳

3号墳の東側に発見されたもので、運動場に通じる道路を建設する際に前面が大きく削平されてしまった。平面形は略片袖形を呈し、主軸方向 N22° E、奥壁部における床面高海抜29m95cm、現存全長2m65cmを計る。玄室長2m5cm、同最大巾1m45cm、天井部は崩落しており、その形態や高さを知り得ない。東壁は床面より30cmほどを残す程度で、西壁は外にひらきながら約1mほど登った後、やや内傾して、高さ1m30cmほどで崩れている。奥壁は主軸線上で40cmしか残存しておらず、詳細を知り得ないが、垂直にちかく、やや内傾している。羨道部は長さ60cmを残すのみで、しかも上部の大半を失っている。黒褐色の有機質粘土が充満していたことから、天井を有しない素掘りの溝であったことが知られる。底面はU字形に掘られている。

羨　道　部

羨道部に閉塞が、玄室には敷石が施されている。閉塞は人頭大の河原石によるもので、羨道底に密着し、高さ約30cmまで方錐状に積まれている。黒褐色有機質粘土は、閉塞石の間や底にも充満していたが、玄室内にはおよんでいなかった。敷石は扁平な河原石によるもので、玄室の西半分のみ



第17図　愛宕横穴群遺物実測図(1)

に認められた。その東側は地山面が露出されており、わずかに敷石とは形態を異にする円礫が2～3個散乱していたにすぎない。

出　土　遺　物

敷石上から耳環一対と須恵器平瓶1個体分の破片を検出した。敷石の拡がりは最大巾60cm、長さ2mの範囲で、耳環は奥壁より70cmと1m20cmの2ケ所で検出された。平瓶は1m60cmの個所と、閉塞石に接して検出された。

- 耳環（第18図15）銅心金貼環、長径21mm、短径19mm、厚さ6.5mm、断面は扁円形を呈する。金箔は大半が剝落し、銅心がむき出しになっている。したがって計測値に誤差があるかもしれない。
- 耳環（第18図16）銅心金貼環、長径21mm、短径20mm、断面は同じく扁円形を呈する。一部金箔が剝落しているほか、錆化による亀裂が入っている。
- 須恵器平瓶（第17図31）胴部および口頸部は硬質で灰色を呈し、自然釉が認められる。底部は軟質で一部を欠損している。現在高13.1cm、胴部最大径14.3cmを計る。底部より約6cmの個所に最大径があり、その部分は箆整形による稜線が明瞭である。口頸部は直口しており、高さ5.7cm、口径5.4cmを計る。

築　造　年　代

築造時期の一端は、出土の平瓶によって知ることができる。胴部の稜線が顕著である点や、頸部がやや長めである点からして、第Ⅳ期前半に比定できる。本墳では第3号墳と同様な棺座を玄室の西半に設けている。その東半には数個の円礫が認められたが、棺台と考えられなかった。棺座には耳環一対が伴い、そこに被葬者のあったことが示されていたが、他の被葬者の存在を示すような副葬

第1表　第3号墳鉄鏃計測値

番号	型式	全長	鋒		箆被ぎ			茎		茎	
			長	巾	長	巾	厚	長	巾	長	巾
1	三角	(130)	15	14	90	5.5	3	—	—	(25)	3
2	三角	(149)	10	12	115	5.5	3	3	8	(8)	3.5
3	斧箭	158	—	8	126	6	—	5	12	26	4
4	片刃	182	40	9	88	6	4	4	9	49	4.5
5	片刃	(161)	37	8	92	6	3	5	12	(27)	3
6	片刃	163	40	7	88	5.5	3	3	11	32	3.5
7	片刃	(160)	18	10	107	7	3	3.5	10	31	3.5
8	片刃	161	40	7.5	83	7	4	3	10	38	—
9	片刃	(147)	28	7	93	6	2	3	10	21	5
10	不明	(151)	—	—	(112)	6	3	3	9	37	3
11	不明	(130)	—	—	(70)	6	5	3.5	9	56	3
12	(鑿箭)	(69)	—	—	—	—	—	—	—	—	—

単位　mm、（　）は現存長、巾・厚は、断面図作成個所の値

品は検出されなかった。本墳が他に類例のない片袖形を呈するのは、下本所8号例（内藤・藤田1968）のごとく、追葬に際して東側に拡張した結果と考えられる。また通常初回の埋葬が玄室の中央部になされるならば、最大2回の追葬が考えられる。初回の被葬者を横へかたづけたとしても1回の追葬は考慮されよう。閉塞石が底面に密着しているのは、追葬がかなり短期間に行われたことを示すもので、それは第Ⅳ期前半代を大きく動くものではなかろう。

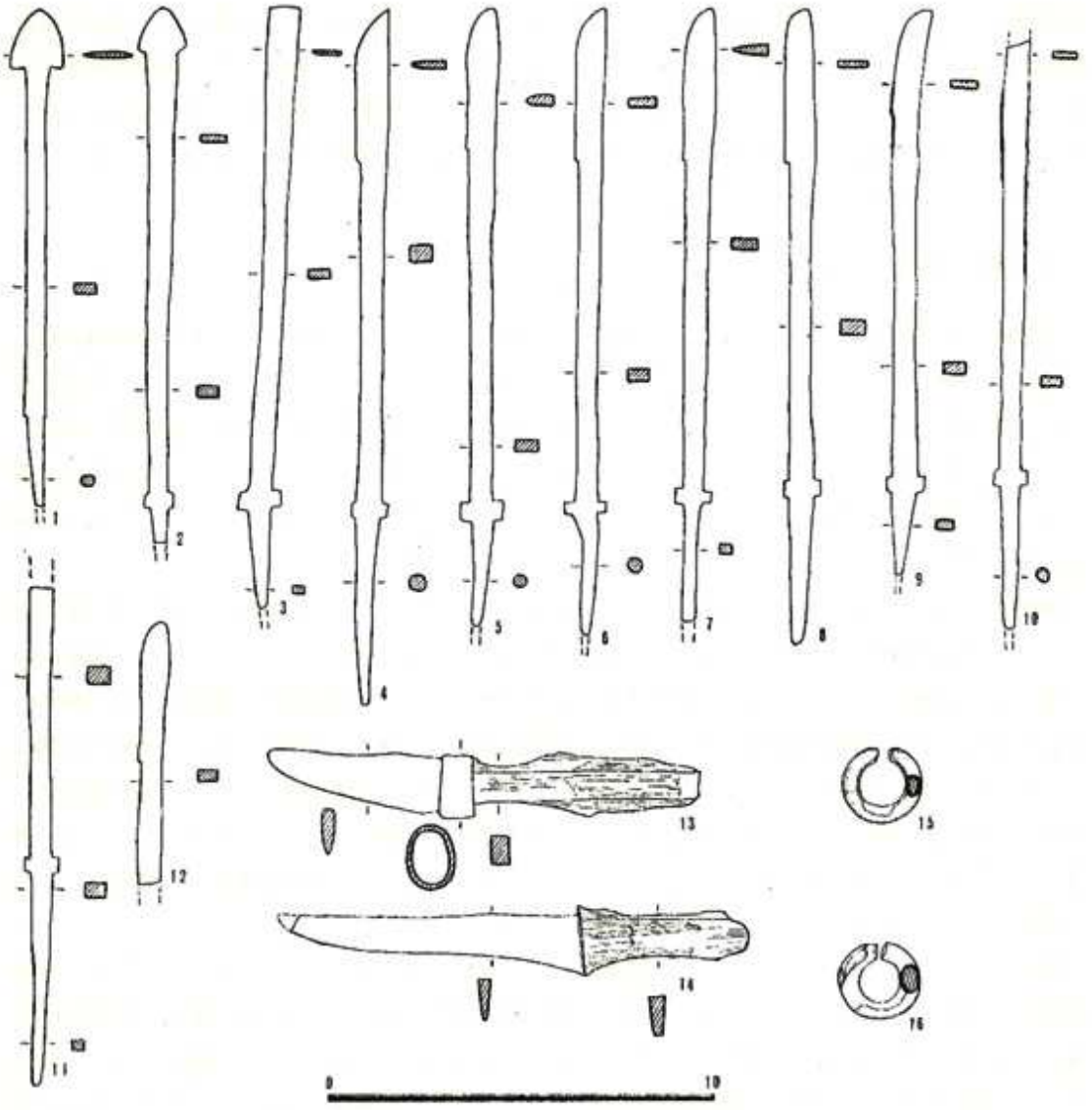
Ⅴ　築造年代について

愛宕横穴墳は4基で一単位を成すことは前述のとおりである。立地条件からして、愛宕山の周辺に他の単位群が存在する可能性はあるが、現段階では発見されていない。またここで報告する4基の他に数基存在する可能性は、同一地点内ではあり得ない。一単位群を構成する4基の横穴墳は、ほぼ同一時期に築造されるものか、あるいは時期をおって逐次築造されるものなのか検討する必要があろう。静岡県内において、単位群全てを調査し報告した例は少なく、検討するには不充分であるが大筋は知ることができる。

静岡県内における群集墳の発生は、須恵器第Ⅰ期とされている（山村他1968）。横穴式石室を内部主体とする群集墳および横穴墳に副葬された須恵器の在り方を第4表に○印で示した。駿河丸山古墳（盛月他1962）例のように、第Ⅲ期中葉に築造されたものに、第Ⅴ期まで最低4回の追葬が行われた例もあるが、第Ⅲ期前葉の築造古墳には第Ⅲ期中葉に、第Ⅲ期中葉の古墳には第Ⅲ期後葉にと、比較的短期間に追葬していることが知られる。また、横穴式石室を内部主体とする群集墳は、第Ⅲ期前葉にその核となる古墳の築造が始まり、第Ⅲ期中葉に盛行することがわかる。そして、第Ⅲ期中葉と第Ⅳ期前葉に新造されるのが一般的で、第Ⅲ期後葉および第Ⅳ期後葉の新造は稀で、その時期の被葬者は追葬という形で認められることが多い。

横穴墳はわずかな例外を除いて、全て群集墳として成立していると言っても過言ではない。9基確認された横穴墳のうち7基を調査した伊庄谷横穴墳（盛月他1963）は6世紀中葉より7世紀中葉までのほぼ一世紀の間に逐次築造されたものであると報告されている。しかし再検討すると、報告者が、追葬を無視して異型式の混在を平均化してしまったという間違いに気付く。そこで図上で坏の最大径を割り出すと、2号・3号・4号・6号ともほぼ近似した値が得られ、共に第Ⅲ期中葉に比定できる。5号墳出土の土師器、7号墳の須恵器も第Ⅲ期中葉とみてさしつかえない。そんな中にあって、第6号墳の高坏のうち2点は、第Ⅲ期中葉に位置づけるのには同意しかねる。むしろ第Ⅲ期前葉に比定すべきである。第1号墳出土の土師器は奈良朝様式、須恵器は第Ⅳ期前半および第Ⅴ期である。つまり最初に核となる第6号墳が築造された後、次に5基が同時期に築造され計6基になる。ややおいて第1号墳が築造された。もちろん須恵器同一型式の存在期間内の事であって、築造時期にはそれぞれ若干の前後があるかもしれない。玄室床面レベルが、東から西に低くなっており、築造も東から逐次築造されたという報告者の指摘もあたらなくなる。東から西へ低いのは、穿れている粘土層には一定の厚さがあって、東から西へ傾斜している為である。

以上ほんの数例をもって一般例としてあげる訳にもいかないが、群集墳の在り方が、各単位群を構成する2基ないし3～4基が、それぞれ築造時期を異にしたもので構成されるものではなく、か



第18図 愛宕横穴群遺物実測図(2)

なり近似した時期に築造されたもので構成され、単位群をなすことが知られる。そして築造時をみると、横穴式石室の採用が各地によって若干差があるようで、核となるべき古墳の築造が須恵器第Ⅲ期前葉であったり、第Ⅲ期中葉であったりするが、大筋において第Ⅲ期中葉と第Ⅳ期前葉に古墳の新造が集中している。駿河地方では第Ⅴ期の新造もある。このことは円墳も横穴墳も共通したことと言える。したがって愛宕横穴墳の築造時期も、第Ⅲ期中葉か第Ⅳ期前葉にしぼって考えることができる。第3号墳も、第4号墳にも追葬ないし合葬が認められる。第2号墳出土の坏身は、他に比べ径がやや大きい。しかしそれを積極的に第1号墳の出土品より時間を遡らせるほどの差とは言えない。一単位をなす数基の古墳を分析した結果、それぞれ近似した時間内に築造された例が多いが、中に一基先行して築造される例もあるので、強いて言えば、第2号墳は第1号墳に先行して築

第2表 刀 子 計 測 値

番号	全長	身		棟巾	茎			備考
		長	巾		長	巾	厚	
13	112	46	12	3	66	8	6	鋲径 16～13
14	(119)	(76)	11	3	43	9	4～2	

単位 ㎜

第3表 須 恵 器 計 測 値

番号	出土古墳	器種	口径	最大径	器高	色調	胎土	備考
17	1号	坏身	99	120	36	黒灰色	良好	
18	〃	〃	90	111	42	灰白色	〃	
19	〃	〃	91	116	45	〃	〃	
20	〃	〃	91	110	38	灰色	〃	
21	〃	坏蓋	116		45	〃	〃	
22	〃	〃	114		49	〃	〃	
23	〃	〃	117		34	黒灰色	〃	天井部に篦記号
24	〃	壺蓋	101		91	灰白色	〃	緑色の釉付着
25	〃	高坏	111		(140)	黒灰色	〃	灰色の釉付着
26	〃	〃	157		128	紫灰色	〃	
27	〃	直口壺	102	108	164	灰黒色	〃	
28	〃	脚付壺	64	136	190	灰白色	〃	緑色の釉付着
29	2号	坏身	111	127	50	灰色	〃	
30	〃	台付盌	76	105	142	黒色	〃	
31	4号	平瓶	57	143	(131)	灰白色	軟質	底部欠損
32	1号	台付盌	105		133	灰色	良好	
33	〃	平瓶	49	109	100	〃	〃	円形符文1個
34	〃	〃	44	140	116	〃	〃	
35	〃	〃	74	158	169	〃	〃	
36	〃	横瓶	(123)	334～210	250	灰黒色	〃	全面に印目あり

単位 ㎜

造された可能性があろうし、第3号墳の鉄鏃にまとまりがあり、平面形が整っている点は、中でも古い様相と言えるが、しかし、積極的に第3号墳も古くすることはできない。一応4基は全て須恵器第Ⅳ期の前半に築造されたものと考えたい。

第Ⅳ期前半の須恵器は、孝徳天皇難波豊碕宮造営に伴う整地層より出土するもので、大化改新前後の実年代が与えられている（中尾1965）。また難波宮前期朝堂院回廊の掘り方内より出土したも

のは、いわゆる宝珠形つまみ付蓋と称されるもので、これらも大化改新前後とされている（宮本1971）。しかし前者と後者とはあきらかに異型式で、浜松市伊場遺跡では層位的に純粋型式が前後関係をもって抽出されている。後者は天武朝の年記ある木簡と伴うものであり、645年以降であるといえる。とすれば、前者第Ⅳ期前半と言われる須恵器は、645年を含めてそれ以前と言わざるを得ない。奈良飛鳥寺造営前の須恵器は第Ⅲ期中葉に比定されるものであり、590年をさほど遡るものではないと考えられるので、590年から645年の間に二型式の須恵器の存在を認めれば、第Ⅳ期前半と称されるものはその後半に位置することは明確である。

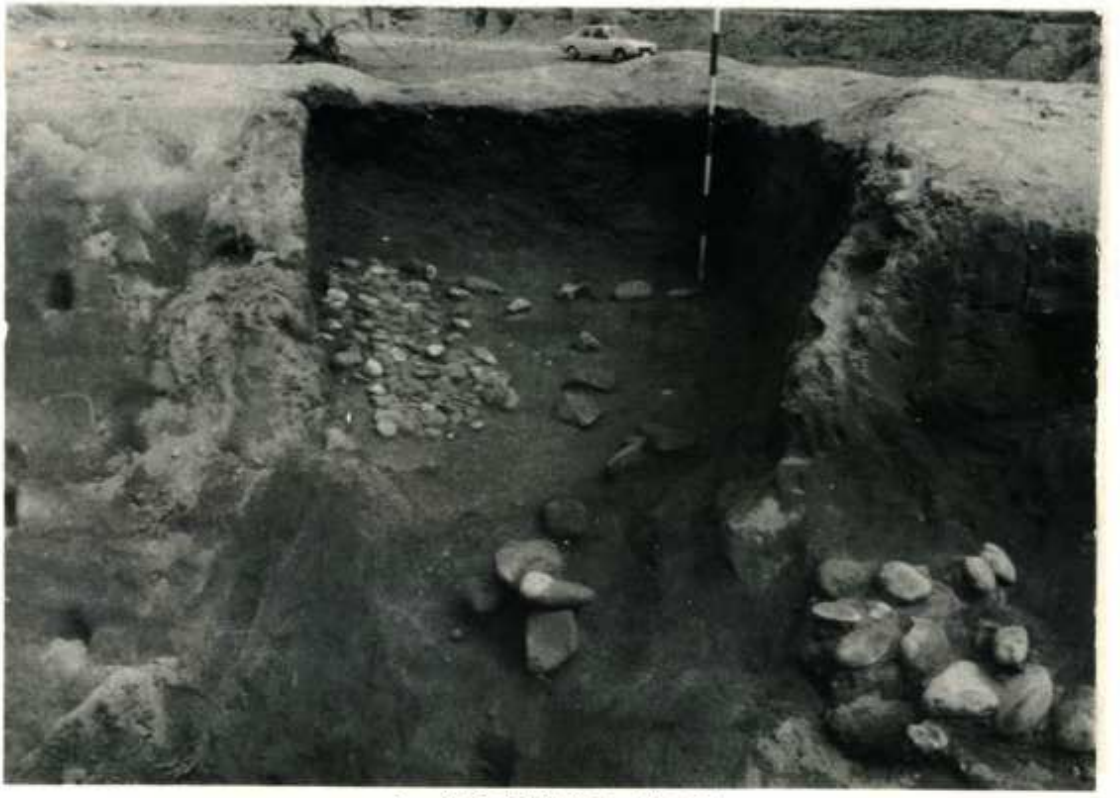
第4表

須恵器＼古墳		睦機山	駿河丸山	谷口原9号	10号	11号	12号	20号	水掛渡1	2	3	5	6	7	9	10	11	12	14	15	TEE9	B1	B2	伊庄谷1	2	3	4	5	6	7
第Ⅲ期	前			○																									○	
	中	○	○	○	○	○	○	○														○	○		○	○	○	○	○	○
	後	○	○		○												○		○							○				
第Ⅳ期	前		○						○		○	○	○	○	○	○	○	○		○	○			○						
	後		○							○		○	○					○	○											
第Ⅴ期			○											○	○				○					○						

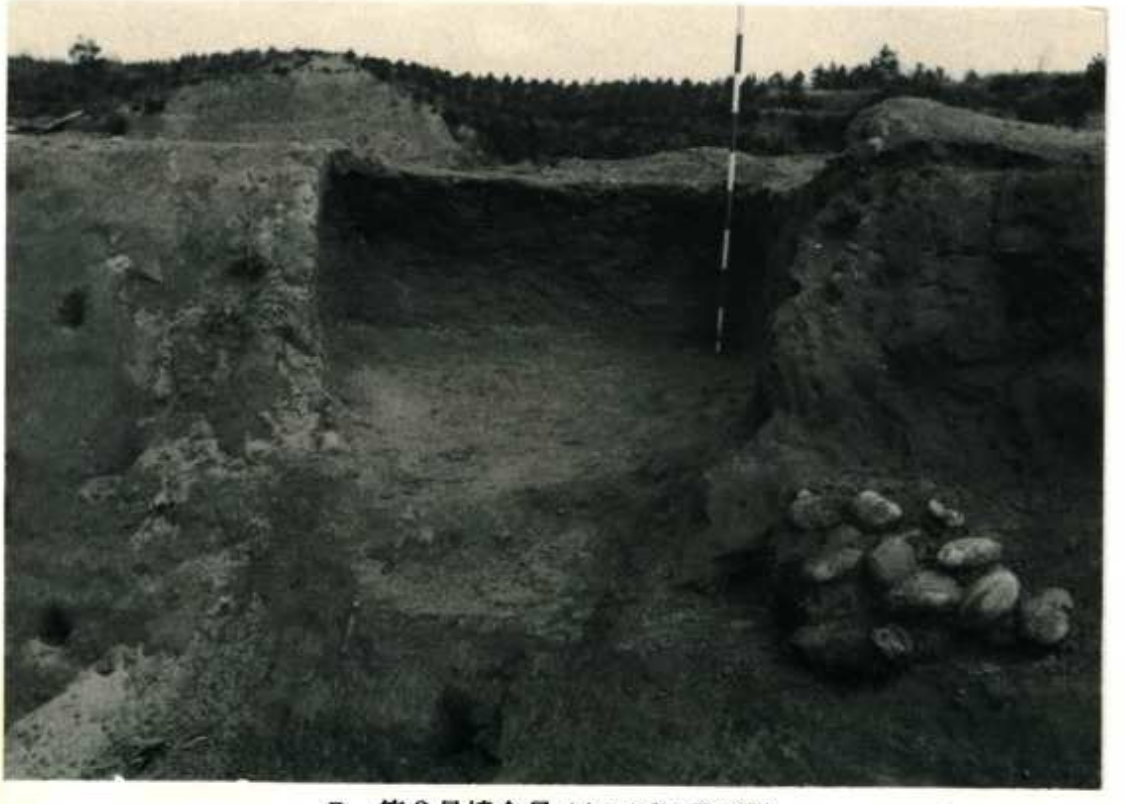
参　考　文　献

- 石田茂作　1961　『天平の地宝』朝日新聞社
- 春田鉄雄　1971　「長田のあけぼの」『丸子路を歩く』
- 望月蕾弘他　1962　『駿河丸山古墳』静岡市教育委員会
- 望月蕾弘他　1963　『駿河伊庄谷横穴墳』静岡市教育委員会
- 山村宏他　1965A　『島田市水掛渡古墳群発掘調査報告書』静岡県文化財保存協会
- 山村宏他　1965B　「島田市谷口原古墳群」『東海道新幹線静岡県内工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 池谷和三　1962　「静岡県小提山第1号横穴墳」『先史学研究』4
- 山村宏他　1968　「遠江の須恵器生産」『古代学研究』50
- 中尾秀治　1965　「難波宮造営前の遺跡調査報告」『難波宮址の研究』5－2
- 宮本都雄　1971　「第40次発掘調査概報」『難波宮跡研究年報』
- 宮本・植松　1968　「掛川市本村横穴墳B群発掘調査概報」『東名高速道路関係埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 内藤・藤田　1968　「小笠郡菊川町下本所横穴墳」『東名高速道路関係埋蔵文化財発掘調査報告書』

図版第7　愛宕横穴群(1)



A. 第3号墳全景（南から）



B. 第3号墳全景（南から敷石除去後）

図版第８　愛宕横穴群 (2)

A.　第３号墳敷石（南から）

B.　第３号墳敷石（北から）

図版第９　愛宕横穴群 (3)

A. 第４号墳全景（南から）

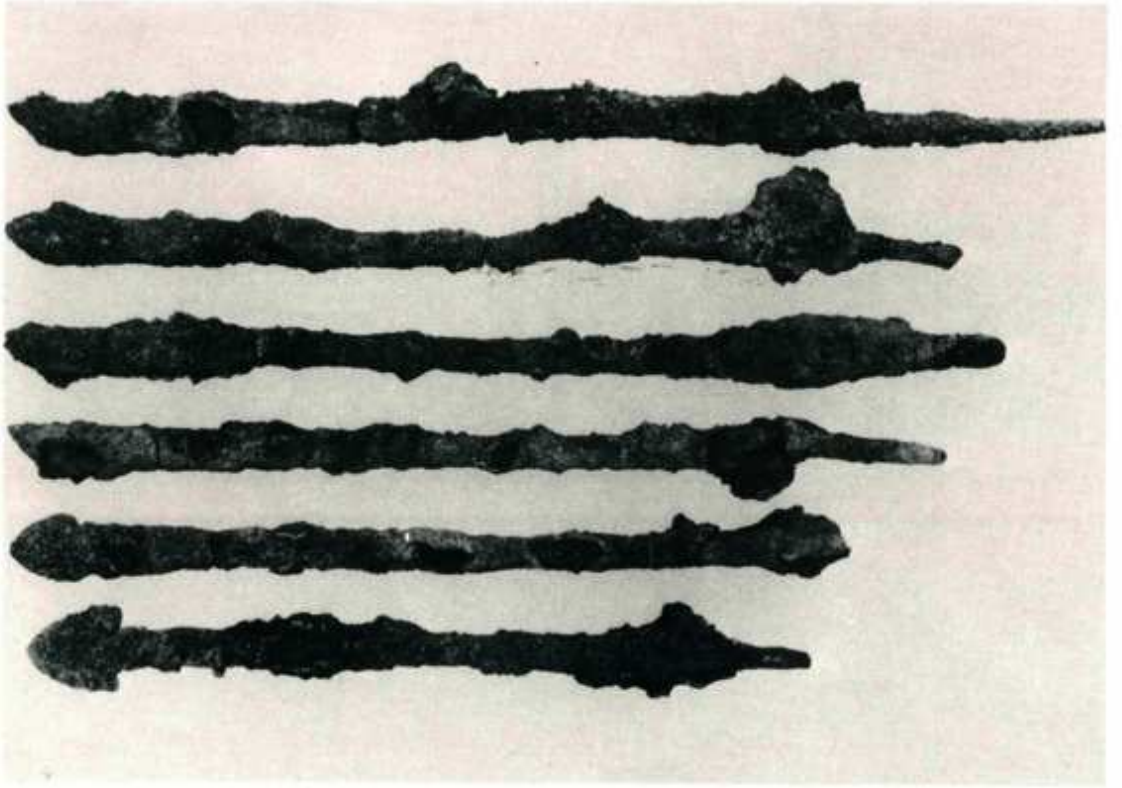
B. 第４号墳敷石（東から）

図版第10　愛宕横穴群(4)

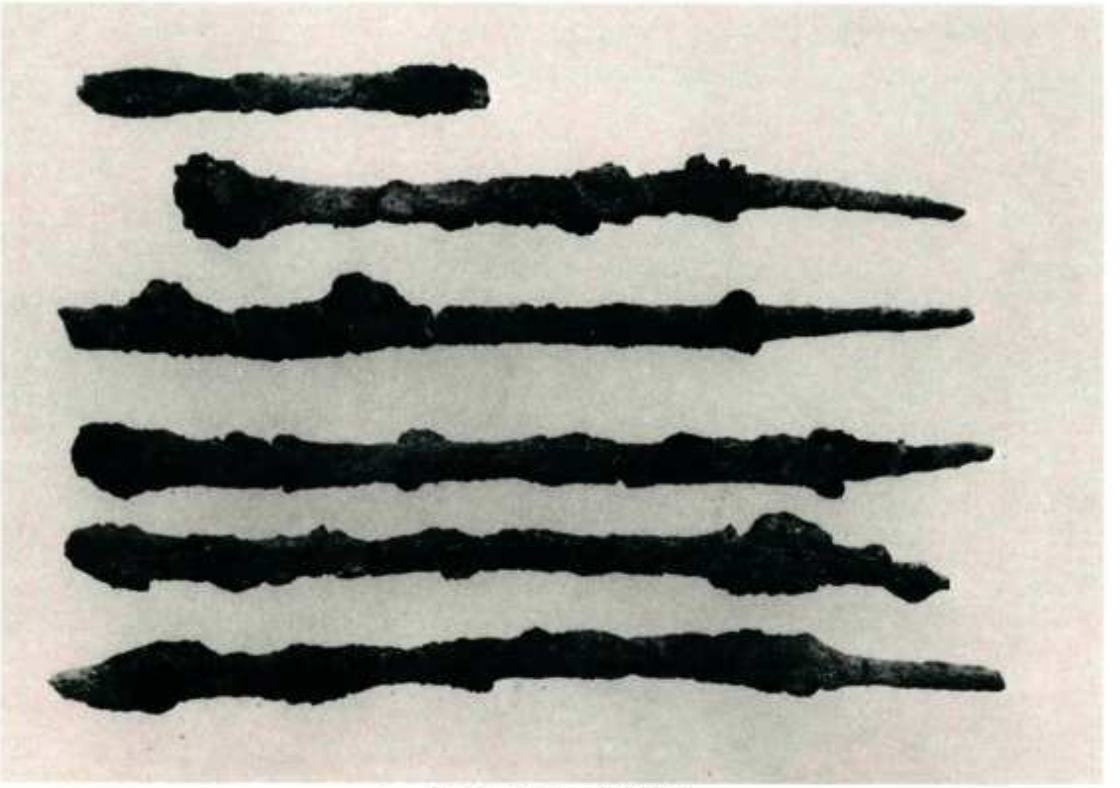
A. 第4号墳全景（南から 敷石除去後）

B. 第4号墳全景（北東から 敷石除去後）

図版第11　愛宕横穴群(5)

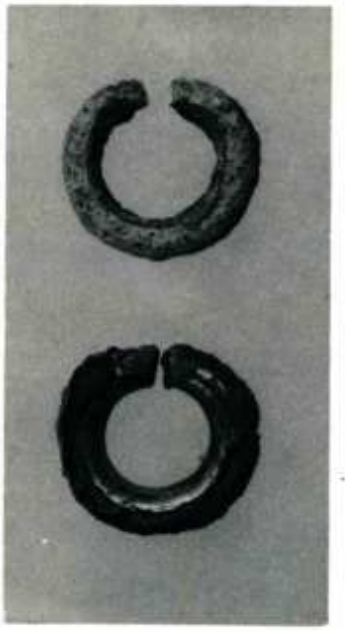


A. 第3号横穴・鉄鏃Ⅰ

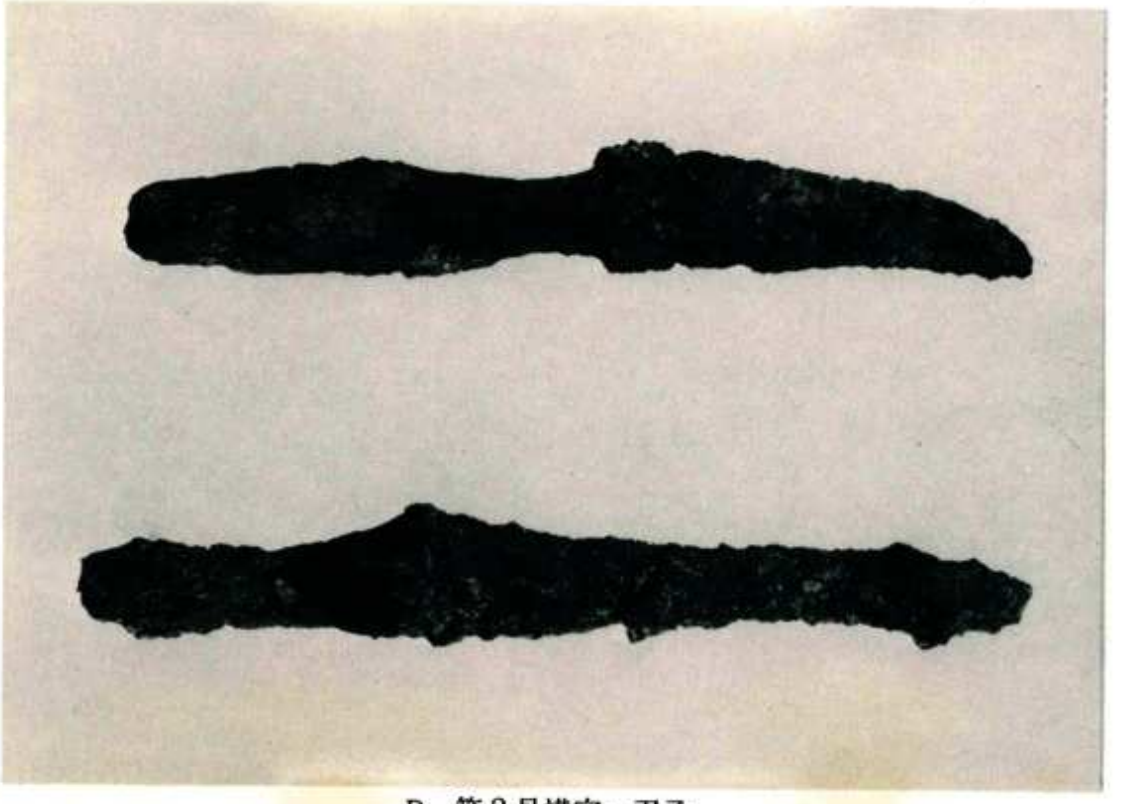


B. 第3号横穴・鉄鏃Ⅱ

図版第12　愛宕横穴群(6)



A. 第4号横穴・平瓶・耳環



B. 第3号横穴・刀子

昭和50年3月31日

大須賀町文化財調査報告書第2集

小笠郡大須賀町愛宕横穴古墳群

調査報告書

著者　川江 秀孝・杉山 彰梧

発行　大須賀町教育委員会

印刷　星光社印刷株式会社

本書は、静岡県文化財調査報告書第13集「静岡県埋蔵文化財調査報告」
より愛宕横穴群の部分を同教育委員会の許可をえて増刷したものである。